

# 優秀賞に熊本北高生物部

全国の高校生が環境や生態系、食品などの調査・研究の成果を競う「バイオ甲子園2018」が17日、熊本市中央区の市国際交流会館であった。ツバキの葉をえさに付加価値を高めた鶏卵を開発した市来農芸高ツバキ研究班（鹿児島県）が最優秀賞、外来種の草の葉



バイオ甲子園で優秀賞に輝いた熊本北高生物部の発表。チョウの幼虫の食性を研究した＝熊本市中央区

を食べるチョウの幼虫の食性を研究した熊本北高生物部が優秀賞の1校に選ばれた。

県内企業や研究機関など産学官でつくるバイオテクノロジー研究推進会（会長・寺本祐司崇城大教授）が毎年開いており27回目。今年は11県から25チームの応募があり、予備審査を通過した6県9校が発表した。

市来農芸高は、飼育するニワトリに独自開発したツバキ茶葉を与え、鶏舎の悪臭低減と高栄養価の卵の生産を実現し、販売促進につなげた。熊本北高は、校内のヤマトシジミが外来種の草に産卵して

いることに着目。幼虫が食べる葉の種類と成長の関係を調査した。優秀賞のもう1校はエゾゼミの分布を調べた国分高サイエンス部2年（鹿児島県）。

県内からは宇土中・高生物研究班も出場し、クスノキを食害する昆虫と香りとの関係性の研究で特別賞を受賞した。（松本敦）